

次の文章は、坂本多加雄著『新しい福沢諭吉』からの抜粋です。文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

問題 1. 「多事争論」について、本文をもとに200字以内で説明しなさい。

問題 2. 福沢諭吉がなぜ「惑溺^{わくでき}」を批判したのか、本文をもとに500字以内で論じなさい。

英雄史観の否定

福沢は、政府の主導ではなく、民間の無数の人々の活動こそが、文明を進歩させると主張したのですが、それでは、その場合、人々が、具体的には、どのような心構えで、各種文明の事業に取り組んでいけばよいと考えていたのでしょうか。

言うまでもありませんが、福沢が、士族に対して、政治活動よりも、まず「独立の生計」をと主張したのは、それこそ、文字通り、単に自分で働いて生計を立てていきさえすればよいということを述べたものではありません。福沢によれば、「一身の衣食住を得てこれに満足す可きものとせば、人間の渡世^{とせい}は唯^{ただ}生れて死するのみ」なのであり、人として生まれたからには、「其志^{その}す所^{けだ}蓋し高遠に在」らねばならないということです（『学問のすゝめ』）。

このことは、福沢が、いわゆる英雄史観を否定したということの本当の意味を探るうえでも重要です。福沢は、『文明論之概略』で、文明発展の歴史的道筋を語りながら、「英雄豪傑」のような「二、三の人物国政を執り天下の人心を動か」すことで、世の進歩がなされるといった考え方を批判し、また、社会が進歩したか否かは、少数の個別事例に着目するのではなく、「一般の実跡に顕わるゝ所」を、「スタチスチク」、すなわち統計的な手法で把握したうえで、判断しなくてはならないと述べています。ここから、民権派批判の場合とは逆に、福沢は、「エリート」的な立場ではなく、「民衆」的な立場から文明の進歩を説いたといった結論が導かれがちです。

確かに、福沢のこうした発言には、幕末期に到達した彼自身のアイデンティティの転換、すなわち、「武家奉公」ではなく「読書渡世の一小民」として生きていくという自覚が反映しています。ただ、この発言は、そのままエリート対民衆という対比図式として理解するよりは、やはり、政府と民間との区別という見地から受け

止めた方がよいようです。というのも、右に引いた箇所からも明らかなように、福沢の英雄史観の批判は、少数の「英雄豪傑」が、他ならぬ「国政」を動かすことで、社会の進歩がいかようにも可能になるとする考え方の批判として述べられているからです。事実、福沢は、「国の文明」は、「上政府より起る可らず、下小民より生ず可らず、必ず其中間より興て衆庶の向う所を示」すことで発展すると述べています（『学問のすゝめ』）。すなわち、民間のなかの「エリート」的な活動によって、「文明」は進歩すると考えていたのです。

この点につき、福沢は次のように言います。一般に、「世に多き者」とは、「智愚の中間に居て世間と相移り罪もなく功もなく互に相雷同して一生を終る者」である。こうした「世間通常の人物」の間に生じる「議論」を「世論」と呼ぶのである。それは「前代を顧て退くこともなく、後世に向て先見もなく、恰も一処に止て動かざるが如きもの」である。重要なのは、そうした「世に多き者」から独立して、現在の「世論に束縛せらるゝこと」なく、「異端妄説」とも言うべき見解を臆することなく表明し、それを実行することにある。文明の進歩とは、こうして発せられた「今日の異端妄説」が「後年の通論常談」となること、さらには、そうした新たに確立された「世論」に対して、再び「異端妄説」が発せられて、それがまた「世論」となっていくという連続の過程を意味するのであると（『文明論之概略』）。

注意して見ると明らかなように、福沢のいう「世間通常の人物」とは、社会階層を固定的に上層・下層と分けたうえでの「民衆」を指すというよりは、むしろ、政界、経済界、学界といった各領域の上層に属する人々を含めて、「世論」に「雷同」している多数の人々のことを指しており、これに対して、「異端妄説」を唱えるのは、「独一個人の気象」を備えた人々であって、いずれの分野・階層においても常に少数であるというのが福沢の認識だったのです。福沢が、「エリート」的活動に期待したという言い方も、そういう意味で捉える必要があります。

「異端妄説」

ただし、その一方で、福沢が「民衆」に期待したという言い方の方も、あながち誤りとも言えない面があります。というのも、福沢は、「異端妄説」を唱え、それを実践に移そうとする試みが、そうしたことを行う人々の個人的な属性や力量によってのみ可能となるだけでなく、むしろ、それが、社会の「気風」として定着すること、言い換えれば、世間一般の人々の間で、こうした「異端妄説」を進んで唱道することをよしとするような心構えが共有されることが文明発達のひとつの指標だと考えていたからです。福沢は、そうした心構えが共有された状態を「自由の気

風」と呼び、そうした気風のなかから、様々な「異端妄説」が出現して、互いに競い合う有様を「多事争論」という言葉で呼びました（『文明論之概略』）。

もちろん、福沢は、「今日の異端妄説」がことごとく「後年の通論常談」になるとは考えていませんでした。というのも、福沢には、既に見たように、個々人の「智恵」は、まことに「微弱」であり、そこから、しばしば「間違い」が生じると考えていたからです。福沢が、知識相互の間にも「交換」が必要だとしていたのは、まさしくそのためでしたが、「世の中が段々進歩すればする程、間違いも亦進歩する」と述べられているように、そうした「間違い」そのものが、知識相互の「交換」から生じる「多事争論」の過程のなかで、試行錯誤的に社会全体の知識のあり方の改善に寄与していくと考えていたのです（「交詢社大会席上に於ける演説」明治13年）。福沢が明治十三年に設立した交詢社もまた、福沢のそうした理想を現実に移す試みでした。

それでは、そうした「異端妄説」を生み出す「智恵」とはどのようなものか。福沢の重視する「智恵」が、社会全般の認識に関わる「公智」であったことは既に見ましたが、ここでは、個別的な「私智」を含めて、福沢の考える「智恵」が具体的にどのような形で働くとされていたかを見ていこうと思います。

今日の私たちの眼から見ますと、福沢が試みた文明化という事業は、ともすれば西洋化の努力として理解され、そこから、福沢の重視した「智恵」の働きも、もっぱら西欧の既存の文物や学問を学びとり、それを紹介するといった具合に理解されがちです。果たして、そうした理解でよいのか。この点は、福沢が、しばしば用いた「惑溺^{わくでき}」という言葉をもとに理解するかということと関わってきます。福沢は、文明を特徴づける「自由の気風」の対極にある精神的態度を「惑溺」と呼んで厳しく批判したのですが、福沢の文章で、「惑溺」という言葉は、たとえば、次のように用いられています。「彼の亜細亞諸州の人民が、虚誕妄説を轻信して巫蠱神仏に惑溺し、或は所謂聖賢者の言を聞て一時に之に和するのみならず……」（『学問のすゝめ』）。この文章では、「惑溺」は、旧来の日本の遅れた迷信や価値観に拘束されている有様を指す言葉として用いられています。おそらく、当初の福沢が最も問題にしなければならなかったのも、このタイプの「古習の惑溺」と呼ばれるものであったと思われます。しかし、重要なのは、福沢の言う「惑溺」とは、本来は、単に旧来の日本の考え方に拘束されているというに留まらず、それ以上の意味を持っていたということです。

実際、西洋文明を模範とすべきことを説いた福沢は、その一方で、「西洋を盲信する」ことを強く戒めた人物でした。福沢は、「日本普通の学者論客」の多くが、

「彼の事物を称賛し、之^{これ}を欽慕^{きんぼ}し之に心酔」し、甚だしい場合は、「之に恐怖して、毫^{ごう}も疑^{うたがい}の念を起さず」、何事も「西洋を標準に立てゝ得失を評論」することを批判しています（『民情一新』）。言い換えると、「惑溺」とは、従来の日本の慣習や迷信であれ、西洋の文物であれ、さらには「世論」であれ、もっぱら一定の見方や考え方にのみ依存して、それに拘束され、まさしく「精神の独立」を失っている状態を指すのです。

坂本多加雄著 『新しい福沢諭吉』（講談社現代新書、1997）、146～151頁より抜粋
（読みやすさを考え、一部にルビを振る等の変更を加えた）

2017(平成29)年度 看護医療学部 一般入学試験問題 訂正

教科・科目	ページ		誤	→	正
小論文	1	注意	2. 解答用紙は1枚です。・・・	→	2. 解答用紙は2枚です。・・・